

かくいへり、硯蓋に干菓子を盛しは、いにしへ菓を盛しなごりにや、とまれかくまれ肴を盛一種の器物となりしは、寶永以後の事なるべし、今さまぐの形を造かへて、硯蓋と稱るは、原をうしなへる也、

〔嬉遊笑覽_{二下}器用〕硯蓋は、元祿已後多く見えたれども、諸國咄貞京二年時代蒔繪の硯箱の蓋に、秋の野をうつせしが、此中に御所落雁煎榧さまふの菓子つみてとあり、但しいまだ一種の器物に作りしにはあらず、徘徊三疋猿寶永元年支考撰木をとめたる竹のしら露季覽菊の香に菓子取ませて硯ぶた涼苑此頃よりのち肴などを盛るものとはなりしなるべし、

〔嘉永年中行事〕黒御所御祝

靈鑑寺、圓照寺、中宮寺などの尼宮なり、長橋の奏者所より参らる、常御殿にてひし花びらきし大服茶硯蓋のさかなにて一獻參る、

〔内安錄〕禁裏附となりて、節分の夜に、内侍所へ警固上げに廻りければ、定式白魚の吸物、地紙形白木の硯蓋に松の枝を立て、肴品々を盛りたるを出し、行事官と武家附と盃事をする定例也、

〔俗耳鼓吹〕天明元年辛丑、小石川布施氏狂歌の名の宅江洲崎望陀欄の主祝阿彌を招請獻立客萬年氏、

予○太田覃祝阿彌、文竿、

十月十七日○中

八幡木地蠟色いつかけ

大硯蓋あらまほ○中略

木地蠟色いろまき繪

硯ぶたおきすがらやき○中略

硯蓋ふき

大硯蓋あらまほ○中略

木地蠟色いろまき繪

硯ぶたおきすがらやき○中略

あくるとし壬寅正月十六日、望陀欄へ布施氏夫婦、子息、予招請、料理付、

孟春十六日、望陀欄略○中

文臺か

御硯蓋か

いとはかや
せこなち
ゑろはぐせ
び
せの
うけり
がすな
○し酢
下、略